

地域連携の探究的な活動で生徒の価値観を揺さぶり 様々な教員による多面的な面談で意思決定を支える

取材・文／藤崎雅子

倉敷南高校（岡山・県立）

生徒の進路希望を揺さぶる 地域での探究活動

岡山県立倉敷南高校は、「自分の言葉で自分の夢を語る生徒」の育成を掲げる、進学重視型の単位制高校だ。同校には高校入学時点で目指す職業のある生徒が少なくない。しかし、少ない人生経験のなかで、家庭や学校生活で目に付く範囲からの目標設定が目立つという。

「本校が生徒に望む進路選択とは、単に自分で決めることではなく、社会や職業に対する厚みのある理解をし、志をもって選択することです。そのためには、将来の目標がある生徒でもいったん揺さぶりをかけ、より確固たるものにしたと考えています」（山下陽子校長）

生徒を揺さぶる中心的な活動となっているのが、倉敷の自治や文化を担ってきた町衆の精神に学ぶ「倉敷町衆プロジェクト」（以下、マチプロ）だ。倉敷商工会議所や地元の名士に、「町衆」としてマチプロへの協力を依頼。その町衆との連携により、生徒は地元が抱える課題の発見とその解決方法に取り組み。2015年度からは海外研修も交えてグローバル化の視点も強化した。

「探究的な活動が生徒に効果的に落とし込まれるよう、町衆1人の人選もいい加減にせず、『短時間で濃く』を motto にプログラムを設計しています」（進路課長・三島誠人先生）

1年次は総合的な学習の時間のな

かで、町衆と仕事や進路について語り合う「ラーニングカフェ」や、市内の企業や施設を直接訪問・見学して町衆から話を聞く「フィールドワーク」を実施（図1）。

そこで発見した課題についてグループで調査・研究を行い、ポスターセッション形式で発表する。2年次は学校設定科目「キャリアアール」で、1年次マチプロの学びをさらに発展させた課題研究を行い、その成果をポスターと小論文にまとめる。3年次は文化祭で地域や世界の課題をテーマにしたディベート大会を行う。こうして地域から世界へと視点を広げながら、進路決定につながる資質や意欲、志を育成している。

「観念的になりがちな普通科教育のなかにあつて、現実社会を生きる町衆から受ける刺激は、生徒の学びや将来へのモチベーションにつながっています」（山下校長）

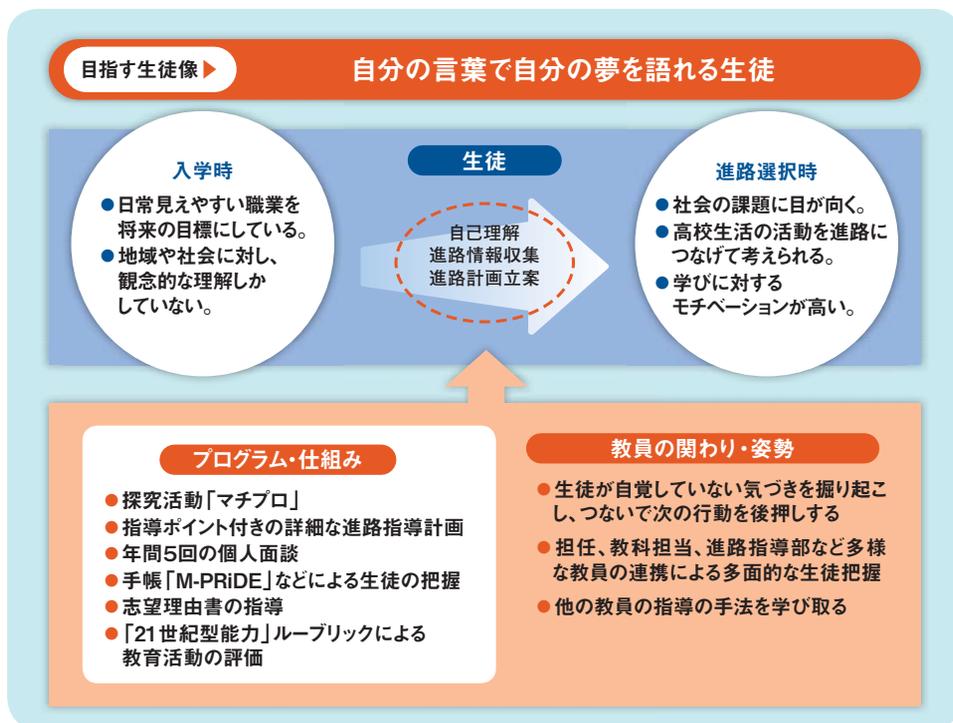
次の一歩につなげる 年5回以上の面談

同校ではこうした活動で生じた気づきや気持ちの変化を次の一歩につなげる、教員の働きかけも重視している。各学年、担任を中心に年間5回以上の面談を実施。その際、主に3つのアイテムを基に話をする。

1つは同校オリジナルの手帳「M-PRIDE」。前半は学校行事の入ったスケジュールで、後半は集会や進路講演時のメモ・感想欄、面談シートなどの記録用になっており、自分が学校生活

のなかで何を感じどう行動してきたかを振り返ることができる。2つ目はマチプロの探究活動で取り組んだポスターとなる。3つ目は、同校が21世紀型能力をベースに開発したルーブリックの自己評価。その結果や推移から、自分の成長や足りないところがわかる。こう

した材料を基に、進路の方向を確認し、次に生徒自身がとるべき行動を考えさせている。「活動で将来につながる気づきや問題意識が生じても、本人が自覚していない場合もあります。そこを掘り起こし、点を線にして進路につながる支援は教員の役割でしょう」（山下校長）

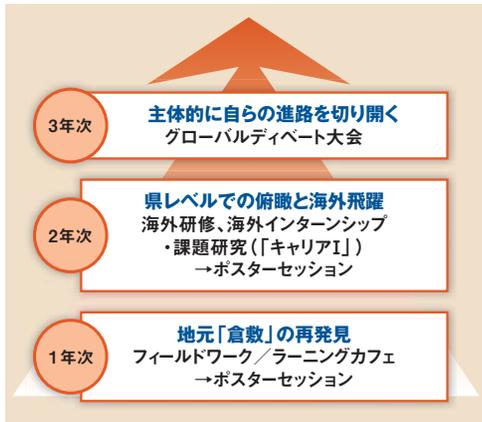




進路課長 三島 誠人 先生

校長 山下 陽子 先生

図1 グローバル「町衆」事業の流れ



多様な大人と語り合うラーニングカフェ(上)とポスターセッション(下)



2016年度版グローバル町衆「21世紀型能力」ルーブリック。「言語リテラシー」「問題発見力」「キャリア設計力」など15項目について、生徒は各自5段階で評価する。

2016年度版グローバル町衆「21世紀型能力」ルーブリック。「言語リテラシー」「問題発見力」「キャリア設計力」など15項目について、生徒は各自5段階で評価する。

面談の様子



分野別にグループで課題探究に取り組んだ「キャリアI」のポスター原稿。

オリジナル手帳「M-PRIDE」。定期的に担任がチェックすることで生徒の状況を把握。

さまざまな活動から生徒が感じたこと

- 改めて、社会には私の知らない職業がたくさんあることを感じました。(中略) もっと職業について、自主的に調べて、より多くの仕事についての知識を増やそうと思いました。(フィールドワーク)
- この講演で一番印象に残った言葉は、「やりたいことは知っていることの中からしか見つからない」という言葉です。僕は中学の時からずっと、(中略)知ろうとすれば世界が広がると考えていました。そして今日の講演でこの言葉を聞いて、僕の考えは間違いではなかったと確信することができました。(グローバルキャリア講演会)
- どんな業界や職業においても、必ず誰かのためや社会、世の中のための仕事があるのではないかと感じた。その人の笑顔や喜んでいる姿を見ることができるよう、みんな毎日命をかけて生きて、働いているのだと思った。多くの仕事があって、世の中は成り立っていると思った。(フィールドワーク)
- 勉強が優秀なのではなく、人に寄り添ったり励ましたりできる人が、医療や福祉の仕事に求められていることがわかった。どんな職種でも大切なのはコミュニケーション能力だと思うので、これからもいろいろな人と関わりをもって、身に付けていきたい。(社会人講話)

このようなやり方では、教員一人ひとりの生徒との関わりが重要だ。そこで同校では、指導の方向性がぶれないよう進路指導年間計画表を作成し、進路主任会議を毎週開いて、時期ごとの目標や各指導項目の留意点を共有している。また、教員のスキルの底上げのため、職員会議後に校内の教員が講師となって「スモールステップ勉強会」を

力強い志望理由が 難関大学合格も可能に

年間10回程度実施しており、「志望理由書のまとめ方」「推薦を突破させる工夫」など進路指導のテーマで行うことも多い。「最も教員が学びやすい場合は、日常の職員室。面談は職員室で行われることが多いので、他の先生のやり方から多くを学んでいます」(三島先生)

昨年度、年2回実施したルーブリックは、全項目で学年が上がるほど数値が高かった。例えば、「情報リテラシー」は1年次第1回が平均値1.76(5段階評価)だったのに対し、3年次第2回

が3.31。同様に「自律的活動力」は1.68に対し3.11だった。21世紀型能力が着実に身に付いており、進路選択時の主体的な態度・行動にも生きていると思われる。3年間の高校生活で進路目標が変わる生徒も少なくない。昨年卒業したある女子生徒は当初「食べ物が好き」という理由で栄養士を目指していた。1年次のマチプロでは、「食」による地元観光地への女子高生の集客をテーマに設定。独自の方法で自然栽培に取り組む農家に学んで、その農家の米を使ったクレープを開発した。農家の自然栽培にかける情熱や課題の話聞いて流通に興味をもち、2年次のマチプロ

では経済系グループで活動。地元の特産品を生かした商品提案をしたり、海外への工場進出を調べていくうちに発展途上国への融資にも関心が向くようになった。そんな彼女が選んだ進路は、難関国立大学経済学部だった。センター試験の得点は自己目標には達しなかったものの見事合格を果たしたのは、「マチプロの経験に基づいた力強い志望理由書が高く評価されたからではないか」と山下校長は言う。マチプロの体験と、それを志へと昇華させ進路に結び付ける教員の働きかけは、生徒が自ら選んだ進路を切り開く大きな力にもなっているようだ。